

■外山雄三／オーケストラのための“玄奥”

外山雄三氏はおそらく指揮者としてのすがたに触れてきた人が多いと思われるが、作曲家でもあり、ピアニストでもある。本も執筆する。かつてサントリー音楽賞の受賞記念演奏会のプログラムに掲載された対談で、「音楽家と言って許してもらえるときには音楽家と言っている」と述べているとおり、それら複数の音楽活動が結びついた存在だ。

外山氏の作品の中で最も有名なのは「管弦楽のためのラブソディ」。7分ほどの曲の中に、「あんたがたどこさ」や「ソーラン節」、「炭鉱節」など、日本人なら誰もが聴いたことのある民謡が織り込まれ、ちゃんちきや拍子木、うちわ太鼓、締太鼓が響く。日本人にとって民謡がこれほど懐かしいものなんだと気づかせてくれる作品である。それ以降の曲は、意識的に民謡のメロディを素材として作られている。つまり「ラブソディ」の発想は外山氏の原点となった。こうしてメロディにそなわっている力を信じることから、彼の創作は始まる。

今日、演奏されるオーケストラのための「玄奥」は歴史のあるアマチュア・オーケストラ、諏訪交響楽団の創立90周年記念を祝して委嘱され、2015年、長野県のカノラホールで初演された。この曲でも外山氏は諏訪にゆかりのある民謡の旋律やリズムをのびやかに響かせている。外山氏が若い頃から身を置いてきたオーケストラは「ヨーロッパで生まれ、発展してきた音楽の、最も豊かな象徴」（外山）であり、民謡という日本の民族音楽をこの媒体で鳴り響かせることこそ、自分の課題だと述べている。また、彼は徹底して現場の音楽家であり続けてきた。たとえば、オーケストラ曲なら標準の2管編成か3管編成、特殊な楽器はほとんど使わずに書く。無理のない編成なら、再演のチャンスも多くなるからだ。「玄奥」も例外ではない。「奥深くて、はかりしれないこと」という意味のタイトルに込めたのは、シンプルにきこえる作品にも洋の東西を結びつけることで初めて実現できる深みを表現するという意味なのかもしれない。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シンバル、大太鼓、ボンゴ、弦五部 ※スコア上の表記